

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.220

ISSN 2432-5295

課外活動

C O N T E N T

- ◆【課外活動】…01～04
- ◆今、こんな仕事しています…05～07
- ◆arpak spirits…08
 - ・関西学術文化研究都市
- ◆近況&イベントのお知らせ…09～10
- ◆まちかど…裏表紙
 - ・まちのフォトコンテスト

「課外活動」

ワークライフバランスやワークアズライフといった考え方に注目が集まり、働き方改革が社会的な課題になっています。仕事と生活（仕事以外）の関係のあり方への関心がこれまでになく高まっています。

ところで、アルパックでは職員の「課外活動」が奨励されています。仕事ばかりでなく、仕事以外の時間も充実させることで人生の幅が広がり深みも増す、それが仕事の質を上げる、ということでしょう。今号では、そうした職員の課外活動にスポットを当てました。職員の多様な一面に触れていただければと思います。

「課外活動が忙しくて、本業の締め切りへの遅延をご容赦」などとは言わないのでご安心ください。

レターズアルパック編集委員会

緑の列島木の家スクール名古屋での活動

中川貴美子：サスティナビリティマネジメントグループ

学生ボランティアとして参加しはじめ、社会人になり、名古屋から大阪に移ってから運動委員として、計10数年の関わりになります。

きっかけは、岐阜の山に間伐体験に行った際に「環境にいい家と売り出す企業も国産の木は使ってくれない」と林家さんの声を聞いたことでした。その声に触れた後、木の家スクールの活動へ参加してみると、職人さんや設計士さんなど、地域で山のため、伝統技術・文化を引き継ぐため、生活者のため活動されている



方々に多く出会い、多面的な考え方に会えることとなりました。運営メンバーも有志の設計士さんや大学の教員の方々で、本業とも関わりながらも、社会活動をされている姿に刺激をいただいています。20年近い活動の中で、時代とともに、テーマも変遷していますが、個で考え、社会とつながり、活動していく大切さを感じています。

参考：木の家スクール名古屋
<https://kinoschool.wixsite.com/nagoya>

まちの一員として感じる喜びからまちづくりを学ぶ

嶋崎雅嘉：地域再生デザイングループ

阪急桂駅を中心としたエリアで毎年開催している桂ヴィレッジフェスというイベントの実行委員会に立ち上げの時から関わっています。紆余曲折もあり、今後に変化していくと思います。基本的なコンセプトは「新しい祭りをつくる」ことです。

「祭り」という言葉には、「毎年必ず開催される」「地域の老若男女が各々の役割を持ちつつ楽しむ」ものであるというイメージがあります。例えば、獅子舞などの無形の文化財が大人から子供に引き継がれ、祭り以身にまとう伝統衣装をつくる産業があることなど、「その地域の文化・産業・人のつながりが引き継がれる仕組み」であることを想起します。

その他に私は、檜原町家灯籠会という地域の街並み保全を目的としたグループにも所属しています。古くて美しい街道筋の街並みを次世代に引き継いでいくために、軒先をお借りしたイベントや、町家保全に係る制度の勉強会を開催しています。

どちらの活動も、地域の人たちが自分の住む町のことを愛して、次世代に引き継ぐための営みとして、とても大切に感じて



います。また、新たな取り組みを若い世代が生み出していくことの素晴らしさや大変さも感じます。

このように、私自身がまちの一員として、未来を担う子供たちに大事なものを伝えていく中で、感じる喜びや帰属意識、まちに対する責任感や愛着を身につける体験は、まちづくりを生涯としている者として大切な課外活動だと感じています。

エリアマネジメントというキーワードがまちづくりの分野で広く使われるようになりましたが、「エリアの価値」を高めることだけでなく、住民として大切なものは何か、引き継ぐべきものは何か、ということを考えていきたいと思っています。

民間・学識協働の研究会に参加しています

山崎将也：都市・地域プランニングデザイングループ

昨年8月に日本都市計画学会の研究交流活動の一環として「民間都市プランナーと学識経験者のコラボレーションによる社会的要請に応じた政策立案とその実装に向けた研究交流分科会」が立ち上げられました。

分科会の活動テーマの1つとして「ウォークアブルなまちづくりに向けた界限性のある都市空間の活用可能性に関する研究」が設定されており、このテーマに基づく今年1回目の分科会が、1月下旬に東京事務所のある千代田区神田界隈を対象に開催されました。

分科会ではまず地図を見ながら、江戸時代以降の神田のまちの成り立ちや特徴、そして現在に至る変遷などを解き明かし、職人町であった江戸時代の町割を基本としながら明治期の土地需要に応じて細分化された街区が現在まで引き継がれている様子を確認しました。細分化の際には3メートル幅員の路地が多く整備されたのですが、今もそれらが残り、神田の街並みの特徴づける要素となっています。

まちの状況を確認した後は、古地図等も見ながら神田界隈の



マンションに囲まれた路地に行む神社

フィールドワークを行いました。神田は駅周辺の商店街の他、オフィス街が広く形成されていますが、路地沿いなどに古い家屋や歴史ある店舗、小さな神社等が見られ、オフィス街と下町風情のコントラストが際立って感じられ、時の移ろいを疑似体験するような分科会となりました。

今回は歴史的な視点から神田のまちの要素について議論しましたが、分科会では引き続き多様な視点で、界限性のあるまちを実際に見ながら、歩いて楽しい、歩いてみたくなるまちに必要な空間要素について研究を進めていく予定です。

まちづくりのアプローチで保育園の運営に関わる

坂井信行：都市・地域プランニンググループ



保育士さんたちのワークショップ

私は社会福祉法人の理事として保育園（4月からは認定こども園に移行）の運営に関わっています。実はこの保育園、地域の人たちと一緒に作ったもので、私も当初から関わっていました。はじまりは、もう15年以上も前のことです。

子どもが生まれた時、私の家の近くには保育園がありませんでした。ニュータウンで土地利用計画上の保育園用地はあるのですが、当時、市は待機児童がいらないことを理由に整備の考えがありませんでした。もともと、保育園がないのですから「待機」しようがなかったのですが。当時は少し離れた保育園まで車で送迎していました。その後、紆余曲折を経て地域住民

が社会福祉法人を立ち上げ、認可保育園を作ることになりました。公設民営ですが、建物についても設計ワークショップなどをやりながら地域住民主導で進めました。

定員30人ではじめた保育園も、いまや本園と分園を合わせた定員が135人と、市内でも有数の大型施設になりました。さらに、障害児支援施設や職員のお子さんを預かる企業主導型保育所まで運営するようになりました。もはや素人の私が運営を担えるようなものではなくなっています。現在は専門家の方を理事に迎え入れ、運営に携わっていただいています。私はもっぱら畑違いの、まちづくりのアプローチでの関わりです。

最近の私のミッションは、法人の中期経営計画をつくることです。保育士さんたちも参加したワークショップを重ね、議論を進めてきています。地域とともにある保育園を標榜していたはずが、規模が大きくなるにつれ地域とのつながりが希薄になりがちです。中期経営計画では地域との関係を再構築することも課題です。その意味では素人の私も、まだ少しはお役に立てるのではないかと考えています。

住民やファンが会える場づくり「左京朝カフェ」を運営しています

江藤慎介：地域産業イノベーショングループ



みなさんは居住している地域の人と出会ったり、一緒にまちづくり活動を始めたりしたいと思ったことはありませんか？

京都市左京区では平成24年度より「みんなであつくる左京朝カフェ」がスタート。8年間継続しているこの活動の当初から、私も区民スタッフとして参加しています。

「左京朝カフェ」は、左京区民や左京区が好きな「左京ファン」が出会い、おしゃべりし、それぞれが取り組む／取り組みたいまちづくり活動にアドバイスをしたり、仲間集めをしたりする場づくりの活動です。現在は年4回程度開催し、この他



にも左京区を中心に活躍する個人・団体の活動披露の場「左京大博覧会」を開催したり、区内で開催されるイベントに出展して盛り上げたりと、多様に活動しています。

京都市では、このような「まちづくりカフェ事業」がほとんどの行政区で開催されていますが、左京区のオリジナルは区役所と区民スタッフが協力・連携し、「朝カフェ企画運営チーム」として運営していることです。私も左京区に転居して2年目に左京朝カフェが開催されることを知り、「場づくりの運営側だけでなく、参加者側の気持ちも知りたい」という軽い気持ちで参加。町内会や各種団体活動等の地縁活動とは異なり、広くゆるいネットワークの取組に面白さと可能性を感じ、そのまま区民スタッフとなりました。参加者だけでなく、私自身も新たな出会いがどんどん生まれており、次はどんな企画をしようかと楽しみが膨らむ毎日です。

『都市の背骨』を舞台にアートとまちづくり

木下博貴：地域再生デザイングループ



豊橋市の中心市街地を流れる牟呂用水、この上に建つ「水上ビル」を上空から眺めるとまるで、巨大な生き物の『背骨』のように見えます。この水上ビルを『都市の背骨 (sebone)』と捉え、ここを舞台にアートによるまちづくりの活動を行うのが「sebone」です。seboneには、作家をはじめ、地元商店街、大学、文化施設のコーナーネータ、アートに興味をもつ様々な方が集い、取組みを支えています。

水上ビルは、東西800メートルの板状の建物に老舗店舗や若い方が集うセレクトショップなどが入居する商店街ですが、特徴ある建物に加えて新旧店舗

が建ち並ぶ、独特の風景を形成しています。seboneでは、この風景を活かし、東三河を中心に国内外で活動する作家と一緒に作品展示や身近にアートを体験してもらうためのワークショップを定期的で開催しています。

また、地元の小学生や高校生にもアートやまちなかに興味を持つってもらうため、授業のなかで作家の出張ワークショップを開催し、これらを通して制作された作品をまちなかで展示するほか、愛知大学地域政策学部とも連携し、学生によるフィールドワークやまちあるき、研究発表会など、アートを中心としたまちづくりになればと考えています。

2016年には、愛知県で開催された芸術祭「あいちトリエンナーレ」の会場の一つに選定されたことがきっかけとなり、空き店舗をコミュニティ施設として活用しており、取組みのPRとともに、様々な方を巻き込み、出会い、そして発想できる場として活動の拠点となればと考えています。

建築を通して子供たちの想像力を養う活動を行っています

原田稔：建築プランニングデザイングループ

私が所属する日本建築家協会（JIA）京都地域会では、2004年から地元の小学生を対象に「建築と子供たち」という活動を行っています。

この活動は建築を通してすべての教科の学習を繋ぎ合わせ、創造力を育てるための総合教育を目指すもので、1990年にアメリカのアン・テラー博士により開発されたカリキュラムが日本に紹介されたことがきっかけとなっています。

具体的な活動としては、私たちが子供たちと共に、町家や歴史的建造物の探検をしたり、家や街並みの模型を作るなどのワークショップを毎年夏休みに開催しています。

夏休み開催ということもあり、夏休みの宿題目的の子供から建築家を目指す子供までの目的は様々ですが毎年定員がすぐにいっぱいになる人気のプログラムで豆建築家のリピーターがいるほどです。また、引率のお母さん方のほうが関心を持たれ積極的に参加されることも多くあります。

私たちは施主や委託者からの要望を単に建築という形に



するだけでなく、建築の立つ場所の気候や風土、歴史や文化、街並みや景観、そこで暮らす人々の生活を踏まえ、それらを総合的に判断し、組み立て建築という形にしています。

この活動を通して建築や街並みに子供たちと共に親しむ機会を持ち、子供たちに建築や自分たちの住む街の課題に関心を持ってもらおうと共に、私たちが子供たちと一対一で話し合いながら模型作りなどを進めることで、色々な課題に向き合い、総合的にものごとを考え判断していく力と想像力を養う一助になればと考えています。

都市の旨みを味わう

中井翔太：都市・地域プランニンググループ



アルパックも参加する「一般社団法人 都市計画コンサルタント協会」では関西の若手コンサルタントが集まり、関心の共通するテーマを定め、都市に関する自主研究を行っています。

今期のテーマは、「おだし」です。料理における出汁は、具材とは異なり、実態は残らないものの、料理に「旨み」を加え、その料理の印象を決める重要な要素であるとともに、地域性や家庭に受け継がれている遺伝子のような存在です。

都市においても、即物的な空間やサービス以外に、都市の印象を規程するとともに、脈々と都市や地域に受け継がれる「何か」があるのではないかという仮説を立て、その「何か」を明らかにするとともに、プランナーとして誘導やコーディネートする方法を探るべく「都市に息づく都市に息づくDNA (Dashi no aji) 研究会」を立ち上げました。

皆さんも一度は、「あのまち（場所）は濃い」といって表現を用いたことがあるかと思いますが。「濃い」とは、一般に何らかの密度が高い状態を

指しますが、何の密度が高いかが、ヒントになるのではないかなどと個人的には考えております。

研究活動はまだ序盤ですが、初年度は、文献調査、お出汁屋さんやお出汁料理屋さんへのヒアリング調査、及び購入した乾物を用いた出汁の抽出体験を通じて、そもそも「出汁」とは何かを整理するとともに、都市における「出汁」や「旨み」、出汁を抽出するための「乾物等」が何かを求め、JRR大阪環状線の各駅周辺のまちを対象としたフィールドワークを通じ、ケーススタディを進めているところです。一定の成果が出ましたら改めてご報告いたします。皆さんも、お住いの地域の出汁について一考してみても面白いかもしれません。



大阪府内にこの8年間で 49 企業が農業参入しました

原田弘之：

地域産業イノベーショングループ

全国的には農家人口は減り続け、担い手の高齢化も深刻な状況ですが、一方で、企業の農業参入が少しずつ進んできました。

農水省によれば全国で3286法人（平成30年12月末）が参入しており、平成21年の農地法改正（リース方式による参入全面自由化）の時点から急激に増えています。業種では食品関連産業や建設業、営農作物は野菜が多くなっています。

一方、大阪府内での実績は、平成23年度から30年度の8年間で49と、年6件のペースで参入があります。面積は0.3ヘクタール未満が半数ほどで全国と比べ、交通の利便性や消費地への近さが参入の理由となっているようです。

そうした中、大阪府と、農地の貸し借りを担う農地中間管理機構の大阪府みどり公社の共催により、令和2年2月7日に「農業参入セミナー&交流会」を開催しました。当社はその企画運営に携わっています。当日は、参入に関心のある企業等から18社22名、受入に関心のある9市町14名の参加がありました。内容は、大阪府内への企業の参入状況や支援制度の紹介、参入事例の報告、市町による情報提供と参加企業の自己紹介を踏まえた相談・交流タイムなどです。



印象に残ったこととして、①障がい者雇用など農福連携の実施やその拡大に関心が高い企業が多いこと、②自社食材の調達のため比較的近い大阪府内に自社農園を設置したい食品製造・販売業がいること、③子供向けの農業体験学習など農業関連サービス業への関心もあること、④農地だけではなく農業に必要な施設や設備・機械などの紹介や仲介の希望があること、そして、⑤できるだけ早く参入したい企業が多いことなどです。それらの多くは大阪府という大都市圏ならではの特徴とも感じられ、将来は府内に企業等が経営する多様でユニークな農業が広がっていくことが期待されます。

そのためには、大阪府や大阪府みどり公社が仲介役として、企業と市町をフォローしていくことが重要ですが、私たちの立場から応援したいと思っています。※本業務は、地域産業イノベーショングループの武藤と遠藤も担当しています。

大阪のど真ん中から盛り上げよう!! ～アメリカ村&船場センタービルにおける新たな挑戦～

高野隆嗣：

地域産業イノベーショングループ

大阪を代表する商い拠点、西心斎橋のアメリカ村と、船場センタービルにおいて、中小企業庁「商店街活性化・観光消費創出事業」を活用したエキセントリックな試みに関わる機会を得ました。

アメリカ村は、個性的なファッションや独創的な流行を発信する街です。昼間は買い物を楽しむ若者が溢れ、夜はバーやクラブがにぎわいます。近隣に多数のホテルが立地するため、近年は多くのインバウンド客が訪れ、「もの消費からこと消費への転換」のモデルとなりつつあります。

近年「eスポーツを活用してミナミを盛り上げる」動きがあることは、本誌でも紹介されたところですが（既報216号）。地元商店主らによる「アメリカ村の会」でも、こうした取り組みを応援すべく「BANPAKU U杯2020」を開催しました。



複数のタイトル戦やファン交流イベントなどで大いに盛り上がりました（写真上）。

一方、船場センタービルは、小売・卸売、飲食などが入居する10棟からなる巨大商業施設です。西日本を代表する繊維卸の集積地である船場の地に、70年万博に合わせて建設されました。

50周年を迎えた今年、ビル区分所有者会主催で取り組まれたのが「船場ミューラルプロジェクト」。イベントや交流のスペースが不足する現状に鑑みて、3号館と4号館を繋ぐ地下通路を催事空間に変える取組です。関西で活躍するアーティスト約20名が集結、迫力ある壁画で埋め尽くしました（写真下）。プロDJを招いた「特設バー」併設のお披露目会も、大いに盛り上がりました。

新型コロナウイルス騒動で水が差されましたが、ターゲットはあくまで2025年「万博」。大阪の情報発信拠点として話題を生み続けてきた2つの街における今後の展開にご期待下さい。

「木地師文化発祥の地 東近江市小椋谷」が 林業遺産に認定されました

浅田麻記子：
地域再生デザイングループ

平成28年度から始まっている滋賀県東近江市での「木地師のふるさと」に関する業務の続報です。

今年で4年目になる本業務ですが、毎年市内で開催されるフォーラムや「小椋」「大蔵」姓の方々（木地師の末裔は「小椋」「大蔵」の姓であることが多いと言われている）へのニュースレターの発行により、市内・全国に向けて、情報発信を続けています。

また、「木地師のふるさと」として、東近江市にあれば、様々な資料を見ることができるといふ拠点づくりのための準備として、市が所有する木地師に関する文化財の分類整理（アーカイブプロジェクト）もボランティアの方々のおかげで、随分と進んできました。

そして、このたび、「木地師文化発祥の地 東近江市小椋谷」が林業遺産に認定されました。全国で33番目、滋賀県内で

は初めてとなるもので、木地師にまつわる歴史と文化は、まさに全国に誇ることのできる貴重な地域資源であることが認められました。また、



写真：林業遺産認定証

林業遺産の中でも、林業に関する場所やモノだけでなく、文化として認定されたのは全国で初めてとなります。

2020年は東京でオリンピック・パラリンピックも開催され、そのメイン会場として整備された国立競技場も全国の木材を使い、日本の木の文化を世界に発信するよい機会になります。今年度は、世界に向けて情報発信を行うため、英語版の木地師パンフレットも作成しました。

東近江市の唯一無二の「木地師文化」の発信はこれからも日本全国、また、世界に向けて、続けていけるように、弊社としても協力を続けていきます。

※本業務は、地域産業イノベーション・高田剛司、地域再生デザイングループの三木健治、小川直史も担当しています。

研修会スケジュール

日程	テーマ
8月	6次化のはじめ方 農家訪問①(農家レストラン) 農家訪問②(加工施設)
9月	個別相談会① ※オプション 企画・開発・販促・プロモーション
10月	事業者訪問(加工機械の見学) 事業計画(骨子)の作成 商品に磨きをかけるデザイン
11月	ネットを活用した販路開拓やPR 個別相談会② ※オプション 衛生管理(HACCP等)
12月	加工品のブラッシュアップ 事業計画の中間発表
1月	直売所訪問(出荷の工夫、消費動向等) 農家訪問③(観光農園、加工施設)
2月	スマホを使った写真撮影 事業計画の完成・発表

共通研修 体験研修
実践研修 専門分野研修

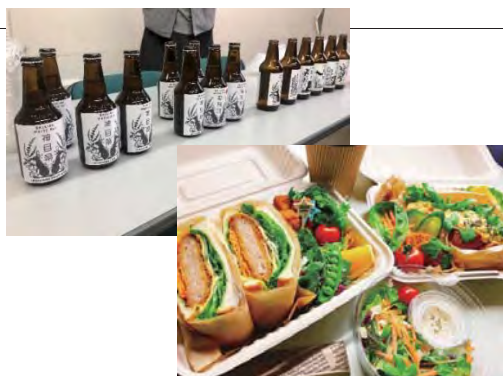
生産者の「夢」実現を応援します！ ～滋賀県6次産業化研修会～

遠藤真森：
地域産業イノベーション・高田剛司

滋賀県には、農林漁業者の6次産業化を支援する取組として、研修会の開催と専門家の派遣があり、事務局を担当しましたのでご紹介します。

研修会は、8月からの7カ月間で、全10日(15回)の連続講座です。事業計画を作成する研修を軸に、6次産業化に取り組む現場を訪問し、リアルな実践ノウハウを学ぶ体験研修や、受講生の関心を踏まえてテーマを設定する専門分野研修など、様々な講座を企画・運営しました。

ところで、「6次産業化」という加工品を作るイメージがありますが、それだけではありません。大事なことは生産者が所得を向上させること。県内各地から集まった20名超の受講生に最初から考えていただいたのは、その所得向上の目的です。「所得を増やしてどんな夢を実現したいか」をまずはっきりさせた上で、講座を通じて、何の事業をするか、実現への道筋をどう描くか考えていただきました。また、各講座ではグループワークや意見交換も重視しました。



写真：上★開発中の薬草クラフトビールの試飲会
下★サンドイッチのランチボックス(スマホ写真講座)

それが今後の取組において、思いもしない新しいアイデアの誕生や、相談・連携できる仲間づくりにつながります。

最終講座では、完成した事業計画を発表し、受講生どうしが交流できるFacebookグループを作りしました。今後も仲間と応援しあいながら、それぞれの夢に向かって進んでいきます。

※本業務は、地域産業イノベーション・高田剛司、地域再生デザイングループの武藤健司、原田弘之も担当しています。

受講生の「夢」実現に向けた事業

- 地域の未来を背負った薬草クラフトビール事業★
- 母娘によるレタス栽培&キッチンカーでのサンドイッチ販売★
- 琵琶湖の漁体験や朝の目覚め体験ができる民泊事業
- エシカル消費者向け、野菜スープの缶詰開発
- 農家とパティシエがコラボしたスイーツ開発
- 果肉を感じるトマトふりかけの開発など...

『お手軽ワールドカフェ運営キット（非売品）』、つくっちゃいました。

廣部出：

公共マネジメントグループ



市民参加の取り組みなどにワールドカフェを行うようになつて、ずいぶん経ちました。

それでもお邪魔した先での「初めての試み」である場合がほとんどで、進行共有の道のりも「いったい実際はどうなるの?」といった不安軽減が中心なこともあるとかなないとか。つまりは、もつとイメージしていただきやすい資料が要るわけです。

他方で、「あのワールドカフェってのはよかったけど、1回こつくりであとが続かないよね」といったお悩みや、「ふだんに職員さんや市民さんにワールドカフェの手法をどんどん活用してもらいたい」「身近で一緒にまちのことを考えるワールドカフェをやりたいから道具がほしい」といったご要望もきつとあるに違いありません。

そんなことで、このたび簡単なワールドカフェ進行用のキットを「紙芝居仕立て」でつくってみました。いつも使用している映写資料等を5枚のフリットと1枚の配布用資料にギュギュットと集約。ホワイトボードなどに掲示するためのマグネットシート、ハーベスト（意見集約）時に用いている大判の付せんもセットしてあります。洗濯して繰り返し使えます。これさえあれば、誰でもこじんまりとしたワールドカフェの運営ができるスグレモノ（規模が大きくなるとフリットが見えませんが）「でもお高いんでしょ?」ご安心ください。このお値打ちのひとつ品、まずは私どもでワールドカフェのお手伝いしたあとで、ご要望があれば差し上げようと考えております。ちよつとした進行ノウハウの口伝付きです。今後とも是非ご最員に。

厳選グルメ 広島県の風味がホーチミンに届く

ホアンゴックチャン：

地域産業イノベーショングループ



2020年1月に広島県産の牡蠣、お好み焼きソース、はっさくジュース等の正規輸入品をホーチミンに届けました。

広島県は、県内の農水産品・加工食料品の海外販路開拓を図るため、物産展や商談会等を通じて、ベトナムをはじめ、東南アジア諸国における支援事業を実施しています。私たちは令和元年度のベトナム市場における支援事業に関わりました。

ベトナムでも、日本の商品、とりわけ食料品が「一通り入手できる環境」になっている為、商品の魅力をバイヤー自身に強く感じてもらえない限り、現地市場に浸透しにくい状況があります。また、現地ユーザーから引き合い要望があつても、商品登録が出来てなければ、取り引きが出来ません。私たちは、現地の有力商社と連携し、現地目線で商品選定を行い、輸出及び販路構築をお手伝いしました。



現在、ホーチミン市では、和食レストランを中心に、①殻付き生牡蠣、②スチーム牡蠣、③お好み焼きソース、④デコボンジュース、⑤はっさくジュース、⑥ラーメン（乾麺）の6アイテムを流通させています。中でも、生牡蠣はホーチミン市中心部の有力料理店十数店舗で取り扱われ、大変好評です。これからも広島県のグルメが広がっていくといいなと思っています。



※アルパック歴の浅い職員が、エポックとなったプロジェクトの現場を創始者の三輪泰司や創成期のメンバーと共に訪れてアルパックのスピリッツに触れ、その一端を三輪やメンバー自身の言葉とともにみなさんにご紹介します。

稲垣和哉

日本の学術研究都市といえば、東のつくば、西のけいはんな（以降、「学研都市」）を思い浮かべるのではないのでしょうか。アルパックは学研都市の構想・計画段階から関わっています。今回のアルパック・スピリッツでは学研都市の計画づくり・まちづくりに関わってきた杉原会長と共に、学研都市の中心に位置する精華町の木村要前町長、測上正博元事業部長、国際高等研究所の三宅論氏、推進機構の中川雅永常務理事を訪ね、お話を伺ってきました。

■学研都市の背景にあるプランニングのコンセプト

「学研都市は研究と生活の場が隣接し、両者が一体となった都市を目指した」

よく比較される筑波と学研都市では、背景にあるプランニングのコンセプトが異なります。筑波は国主導のプロジェクトで、既存の研究機能の移転がメインであり、そのまちで生活するのは主に研究者でした。

一方で京都・大阪・奈良の中間地点にある学研都市は既にコミュニティのある精華町（京都府）などを中心に、新たな機能である民間研究施設を誘導しながら地域活力を生み出していくことを目指していました。そのため、開発地域と周辺地域の区別をつけず、昔からの住民と新しい住民との交流と融合に配慮したプランニングが求められました。

この「2つの精華町をつくらない」というコンセプトは、精華台小学校の配置に見られます。地元住民と新

住民との繋がりをつくりだすために、小学校を新旧エリアの間に立地させています。これにより、地元住民も研究者など新住民の子どもたちを同じ学校に通わせることができ、子ども・親同士で交流が生まれました。

■コンサルタントとしての職能の確立

「誰もやったことのないビッグプロジェクトに取り組む中でコンサルタントの職能が確立されていった」

当時は社会的にまだ都市計画コンサルタントという仕事の認知度が低く、また都市計画が仕事になるのかどうかも分からない時期でした。

計画技術もノウハウもこれからという時期に、前例の無いビッグプロジェクトを前にして、アルパックの所員は行政職員と一緒に頭を悩ませながら考えていったそうです。このようなプロセスが行政との信頼関係を生み出し、また所員の技術力・ノウハウの蓄積に繋がっていききました。こうして、徐々に実績を積み重ね、現在の職能が確立されていきました。

コンサルタントとして求められている役割に「提案すること」がありますが、それ以外にもコーチとしての役割があります。

学研都市では、構想段階から「学研都市とまちづくりのあり方に関する研究会」などを開催・支援し、学研都市を精華町で受け入れていくまでの道筋をつけていきました。ここでの学識者との議論やアドバイスは国との調整などにおいて大きな後押

しとなったそうです。また、研究会では、プロジェクト後の地元自治体の収支計画など、まちづくりの基礎となる様々な分野について学び、知見を深めていきました。

さらに、学研都市の原型を学ぶために、国内外の事例視察を企画しました。筑波へは担当する精華町の課長以上すべての職員が現地を訪れ、職員それぞれが当事者意識を持って考えるきっかけをつくりました。また、アルパックの霜田稔さんは、ケンブリッジのサイエンスパーク、ベルギーの大学都市ルーバン・ラ・ヌーブにも足を運んでいます。ケンブリッジの視察では、サイエンスパークの周辺に大学の卒業生や研究機関が集積している「ケンブリッジ現象」を発見しました。これは学研都市でスピニングアウトしたベンチャー企業を育成していく受け皿である、「けいはんなベンチャービレッジ」のプランニングに活かされています。

アルパックの創業時、人数は少なかつたもののその若さと体力と情熱でまちづくりのあらゆる分野に挑んでいたそうです。そのモチベーションの背景には、新しいことに挑戦するわくわく感、学ぶ楽しさがあつたのではないのでしょうか。

■アルパックの地域密着とは「休日に家族で現地に遊びに行く」とで土地勘をつけていった

まちづくりにおいては単なる技術だけでなく、それが社会でうまく機能するために地域での信頼や合意が必要となります。

アルパックの所員は休日には奥さん・子どもを連れて学研都市の現場へ遊びに行ったそうです。平日は仕事のためスーツ姿で警戒されがちですが、休日は私服で家族というため、地域の人も自然に話ができたようです。仕事だけでなくプライベートでも地域と関わりを持つことで、地域の人たちからの信頼を得て、様々な情報を得ていきました。

アルパックでは「地域密着」ということがよく言われます。このように計画・構想だけでなく、地域の生活まで重層的に関わっていくことがアルパックのやり方なのかもしれません。

学研都市はアルパックの代表的なプロジェクトであることは知っていましたが、具体的な内容については知る機会がなかなかありませんでした。今回の視察でその内容を知るとともに、当時のアルパックの熱量や仕事に対する姿勢を感じることができました。

学研都市については、ニュースレター1199号「伝承譜 その4」を参照ください。

[arpak と関西文化学術研究都市]

関西学術文化研究都市は、1978年奥田東（元京都大学総長）が中心となった「関西学術研究都市調査懇談会」の提言により、京都・大阪・奈良をまたがる京阪奈丘陵に新産業・新文化の発信拠点として、産声をあげました。アルパックは、構想、計画段階からお手伝いしました。



20回 食とエネルギーによるローカル SDGs 戦略 ～里山資本主義「真庭」の挑戦～ 真庭市総合政策部長 新田直人氏

真庭市は平成 30 年度に、SDGs の達成に向けた優れた取り組みを行う先進自治体として、「SDGs 未来都市」に認定されました。当日は、「食とエネルギーによるローカル SDGs 戦略」と題し、真庭市での取組についてご講演いただきました。

豊かな森林資源を活かした CLT 等の木材活用やバイオマス発電所の運営、中山間地域を元気にする「スマート農業」の推進、真庭の多彩な地域資源を活かした観光地域づくり、地域循環共生圏構築に向けた「真庭のシシ（ごみアート）」、「真庭里海米」など、様々な取組につきご説明いただきました。

各部局が違う方向を向いて頑張っている状況から、「真庭里海米」をきっかけに連携して経済・環境・社会をつなぐ、という言葉が印象的で、SDGs の実現のための一つの形であると感じました。（盛川正和）

21回 公共分野におけるプロジェクト・デザインを考える 京都大学大学院工学研究科准教授 山口敬太氏

京都などの協議調整型の景観づくりの取り組み事例から、世界の道路空間の歩行者空間化の動向、京都府久御山町の公園の整備・利活用に関する取り組みを実践されている「久御山まちのにわ構想」まで、幅広い内容についてご紹介いただきました。

特に久御山町ではまちづくり構想の検討から公園の整備・利活用に向けた事業化方策の検討までトータル

で関わっておられるということで、研究の枠を超えた取り組みを展開されています。新しい取り組みを進めるには、「いかに面白そうな絵を見せて他の人を巻き込んでいくか」というコンセプターやキュレーターの役割の重要性を指摘されていたのが印象的でした。（橋本晋輔）

22回 世界の観光都市はオーバーツーリズムにどう立ち向かっているか 龍谷大学政策学部政策学科教授 バルセロナ自治大学客員研究員 阿部大輔氏

観光都市であるバルセロナ、ヴェネチア、アムステルダム、ベルリンなどのオーバーツーリズムの現状と最新の対応施策についてご講演いただきました。

コロナウイルスが流行する前の日本では、京都などの観光地で、人の混雑について度々報道されていましたが、オーバーツーリズム現象による大きな影響は、人の混雑ではなく、街の業種業態が観光客向けに大きく変換することだにご説明いただきました。

具体的には、地域の老舗店舗や生活に密着した店の多くがドラッグストアやチェーン店となり、市場機能が立ち食い機能に変換されることや、物価や地価の上昇により生活居住者が減少することなどが挙げられます。

関西でも、あらゆる観光地や城下町でレンタル着物店、ドラッグストアなどインバウンド客向けの商店が増えてきていると実感していたので、改めて国内の観光地の危うさを感じました。また、事例としてお話しいただいた「fairbnb」という地域の宿泊事業で得た利益の一部を地域のまちづくり活動に循環するシステムが国内でも広がりをもてる日も近いかもしれません。（水野巧基）

アルパック Bar を開催しています

杉本健太郎

建築プランニング・デザイングループ

アルパックでは、大阪事務所内にある C&L (Community and Library) スペースを利用し、若手有志が中心となり不定期でアルパック Bar というイベントを開催しています。C&L スペースとは、ミーティング、各種作業、ランチ、談話、社内向けレクチャー、専門図書の閲覧などに使われているスペースです。

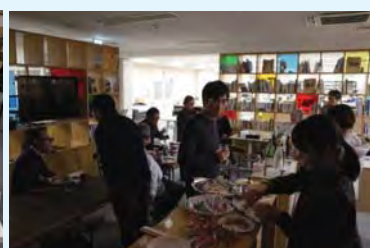
ある時、一部の所員から、C&L スペースの現在の利用実態について、整備当初の多目的に創造性のある使い方をしてほしいというコンセプトとは裏腹に、使われ方が限定的になっているのではとの意見がありました。例えば、一角に設置されているカウンターと棚は、Bar のようにも使えるカウンターとして考えていたとのことでした。そこで、当初の想いを実現すべく、若手有志で終業後に Bar を開催することになりました。

社内交流、コミュニケーションの促進、C&L の多様

な使い方の実践と開催目的を定め、運営は、持ち寄りのお酒を中心に、1 ドリンク 200 円で設定し、社内の経費に頼らない独立採算としました。旅先で購入したお酒など、個人のストーリーを絡めたお酒を持ち寄ることで、新年会、忘年会とはまた違った個人の一面を新たに知ることもあります。今のところ不定期ですが、いずれ定期的にやれるといいなと思っています。



仮設で増設された Bar カウンター
(塗師木作成)



照明を落として終業後に
催されるアルパック Bar

近況 & イベントのお知らせ

受賞
しました

吉香茶室が第2回いわくに景観賞（建造物部門）を受賞しました

高坂憲治

建築プランニング・デザイングループ

本誌 217 号でご紹介した、岩国市吉香茶室の設計が第2回いわくに景観賞建造物部門に選定されました。いわくに景観賞は、「市民一人ひとりが、『景観』を身近に感じ、また景観への意識・関心を深めていただくことを目的」に、平成 29 年度に創設されたものです。

吉香茶室は、岩国藩第 12 代当主（藩主）である吉川経幹の長男経健が明治 25 年（1892）、東京から岩国に居を移す際、邸内の祖霊社と共に移築し、その後市に寄付したものです。今回の修理にあたっては、外観を変えることなく耐震補強と修理を行いました。また、茶庭（露地）については近接する錦帯橋や吉香公園と一体となって市民や観光客が回遊できるように回遊動線を計画しつつ、同時に設計した園路と一体となった茶庭となるようデザインを意図しました。

この度の受賞理由が「屋敷地が開放されていることから、通りがかる人が眺めることができるよう低い塀柵とし、通り抜けの通路を修景している。建築物の改修は和風の趣を維持し、特に外構および通り抜けの通路の修景が、茶室の趣を活かし横山地区の歴史性に配慮した環境整備となっており、屋敷地の景観継承に寄与している」（岩国市景観審

議会講評より）であることから、私達がめざしたデザインの考え方が評価されたもので大変うれしく思っています。

吉香茶室周辺には、錦帯橋はじめ吉川家の居館があった御土居と堀に囲まれた吉香神社（国重要文化財）や錦雲閣（絵馬堂）（国登録有形文化財）、旧吉川家廬門（国登録有形文化財）、能舞台などが横山山頂に再建された岩国城と一体となった美しい歴史的景観をみせています。

表彰式当日、福田良彦市長とお話しする機会があり、岩国市の観光拠点の一つとして吉香茶室を位置づけた今回の設計意図をお話しし、吉香茶室のある横山地区と錦川対岸の城下町地区を含めた全体の回遊動線の構築をお願いしました。岩国を訪れる機会があれば、是非これらの吉川家の遺構と共に城下町の散策を楽しんでいただきたいと思います。

なお、第2回いわくに景観賞では、吉香茶室の他に、まちなみ・まちづくり部門で旧山陽道の整備や清掃、遺構調査などを続ける「関戸歴史の会」、耕作放棄地を活用したそばづくりを行う「中倉あすなる会」、錦川流域の放置竹林の整備や竹資源の活用に取り組む「竹の会」が選定されました。



吉香茶室全景



園路と茶庭塀（山頂に岩国城が見える）



福田市長 筆者 小浦審議会会長

中国四国気候変動適応広域支援センターを発足しました

植松陽子

サステナビリティマネジメントグループ

現在、気候変動の影響が顕在化し、地域の社会・経済へ影響を及ぼしつつある中で、温室効果ガスの排出削減対策（緩和策）とともに、気候変動の影響による被害の回避・軽減対策（適応策）も、地域においては喫緊の課題となっています。

平成 29 年度からは、全国 6 地域で地域適応コンソーシアム事業（環境省・農林水産省・国土交通省の連携事業）が実施されています。当社は中国四国地域の事業を担当し、様々な大学や研究機関等との共同・連携体制を構築しながら、気候変動影響予測や適応に関する調査事業を進めてきました（本誌 211 号で紹介）。

この事業を契機として、地域の大学の研究者などの有志が集まり、地域の適応検討に対する広域連携のニーズ等に応えるため、「中国四国気候変動適応広域支援センター」を令和 2 年 2 月 4 日に立ち上げました。当社も当初より参画

し、センターの事務局を担っています。今後、センターでは、次のような広域・統合的な支援を行っていく予定です。

- ・地域（自治体、団体、事業等）の気候変動適応策の検討に関する支援
- ・気候変動の影響に関する科学的知見の調査・研究支援
- ・地域での気候変動の影響および適応策に関する普及啓発
- ・そのほか気候変動適応に関する広域連携に関する事業

なお、地方自治体および関係機関等の地域のステークホルダーが、事業パートナーとして参画することも可能です。ご相談やご依頼など、随时お待ちしております。

詳細は、中国四国気候変動適応広域支援センターまで、お気軽にお問合せください。

<https://csacsc0204.wixsite.com/home>

本件は、サステナビリティマネジメントグループが担当しています。

「ええやん洛西」フォトコンテスト
＃ええやん洛西まのち
かどまのちのフォトコンテスト
〜洛西ニュータウンでのフォトコンテスト〜

若い世代を中心に広がっているインスタグラムを使ってフォトコンテストを行っている自治体も増えてきたように思います。

石井努：
地域再生デザイングループ

最優秀賞「いま」の洛西（撮影場所 桂坂並木道）

昨年の秋から冬にかけて、京都市の西側に位置する西京区の洛西ニュータウンでは、地域の知名度アップやまちへの愛着を高めてもらうことを目的に、インスタグラムのフォトコンテストを開催しました。

ニュータウンの西側に位置する昔ながらの農業地域でもある大枝・大原野地域も対象エリアに取り込んだこともあり、歴史ある寺社の写真や休耕田を使ったひまわり畑等の写真が数多く応募されてきました。



最優秀賞「これから」の洛西（撮影場所 洛西イルミ）

一方で、まちびらきから40年以上を経過したニュータウン内には緑が多く、街路樹は立派に育ち、秋にはきれいに紅葉し、住民にも愛される身近な自然として、原風景の一つになってきているように思えるほど、「まちと緑」の写真の応募もたくさんありました。

写真そのものの出来栄は、雑誌の表紙を飾るようなプロ級の写真をはじめ、インスタグラムのコンテストにふさわしく、美しい写真が多く、入選作品を決定する審査委員の方も、唸りながら審査をされていたのが印象に残りました。

写真そのものの出来栄は、雑誌の表紙を飾るようなプロ級の写真をはじめ、インスタグラムのコンテストにふさわしく、美しい写真が多く、入選作品を決定する審査委員の方も、唸りながら審査をされていたのが印象に残りました。

一方で、まちびらきから40年以上を経過したニュータウン内には緑が多く、街路樹は立派に育ち、秋にはきれいに紅葉し、住民にも愛される身近な自然として、原風景の一つになってきているように思えるほど、「まちと緑」の写真の応募もたくさんありました。

写真：上 優秀賞（撮影場所 大原野ひまわり畑）
下 優秀賞（撮影場所 大原野神社）

方も勉強になりましたが、いろんな見方でまちを見ている人がいるものだあと、つくづく思いました。

「フォトコンテスト」という、オーソドックスなイベントですが、インスタグラム、スマホや携帯電話というツールにより、参加してもらえる方の幅が広がり、参加者同士で写真を楽しめたり、評価もできる、コミュニティも形成される等、様々な波及効果があります。今後もインスタグラム等のSNSを使い、「人」と「まち」を結び付けるイベントは増えてくるのではないかと思います。

お住まいのまちや観光で出かけた先のまちで、インスタグラム等を使ったフォトコンテストがあれば、みなさんも応募されてみてはどうでしょうか？これまでと違ったまちの魅力や、自分自身とまちとの関わりが見えるかもしれませんよ。

表紙写真：アオサギと桜 嵐山の法輪寺から／撮影 中村孝子



「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。

アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所 〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F

TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所 〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル17F

TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所 〒101-0047 東京都千代田区神田1-15-7 ユニゾ内神田1丁目ビル4F

TEL(03)5244-5132 FAX(03)6273-7715

九州事務所 〒810-0802 (株) よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F

TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

ホーチミン 0908.CJ Building.2-4-6 Le Thanh Ton street. District 1 HCMC.Vietnam (ベトナム)

TEL+84(028)6255-6732

この用紙は「びわ湖の森を元気にする」
Kikitoペーパーを使用しています。